

釣り文化

14 1985



釣り文化協会

伊豆狩野川の鮎の友釣り技法の伝播 (四)

|| 飯塚利八氏 長良川に行く ||

常 盤 茂 雄

前回は土屋嘉一氏が利根川へ移住したことを書いたが、今回は初めて伊豆から長良川に遠征した飯塚利八のことを述べる。



飯塚利八氏

(一) 飯塚利八氏のこと

八十七才の飯塚利八氏を狩野川が流れる静岡県湯ヶ島町、本柿木に訪ねたのは六年前の早春頃だった。

一諸に湯舟につかり寝床を並べて友釣りにかわる明治から大正、昭和、戦前から戦後の話を、ある時は利八氏一人で、またの日は同時代に生きた釣り師、落合一郎氏と共に聞くことができた。

伊豆から他国へ移住していつた四人の釣り師のこと、利八氏自身狩野川から初めて職漁者として長良川へ遠征した時のいきさつ、紅がら格子の郡上八幡の町並み、大火事のこと、長良川、飛弾川の釣り師等の思い出など、狩野川の近代友釣り技法伝播の過程を知るうえで、再び聞くことのできない貴重な証言であつた。

飯塚利八氏は大正年代の始め、しいたけ栽培に着目し、失敗を繰り返しながらやがて静岡県一のしいたけ栽培家として家業を立てていつた。小柄で声が大きく行動力に富み誠実で卒直な人柄は、戦後村会議員に推選されたり、初代狩野川漁業協同組合長としても長くその責を全うした。

しかし、昨秋深まる十一月十四日九十二才の利八氏は世を去つた。

飯塚利八氏は友釣り師として卓越した釣り師だつた。若い頃から川郵便、川いたち、と呼ばれやがて「けんか組合長」といわれながら、中

外鉾業、持越金山の鉾毒流出事件、一九五四年（昭和二十九年）起きた東洋醸造の廃液放流事件に狩野川のアユと魚類を守るために奮闘し、今後、各河川各地域で起こるであろう類似の事故を防止するため、水質汚濁と工業排水の取締り強化を同年、滋賀県彦根で開かれた全漁連大会で提案し、大会は河川環境を守り公害を防止する立法化を要請する決議を満場一致で採決させている。

昭和二十年代、狩野川のアユを守るために、公害防止を強く訴えた飯塚利八氏の先見性は今を知る人の心の中に強く焼きつけられている。

飯塚利八氏は一八九二年（明治二十五年）十一月二十五日、静岡県田方郡湯ヶ島町、本柿木で生まれた。

利八氏によれば「親父も釣りは好きで、木綿針をローソクの灯に当てハリの型をつくり、木綿糸でハリをくくつてアユの友釣りをしていた親父の姿を見ている。」「俺が初めて友釣りをや

つたら六尾獲つたことを憶えている、子供の時だ、まわりの人がこの子供はうまくなるぞなどとおだてられ、だんだん面白くなつてアユ釣り師になつてしまつた。」

利八氏は十七、八才から幾年かを製版職工の見習工として、静岡県富士の岩淵というところで徒弟として働いていたが、不景気のあおりを食つて会社が倒産し、柿木に帰つて、二、三人で山を買つてはしいたけの栽培をしながら夏は金になる友釣りに専念していく。

「俺は釣り仲間から川郵便、川いたちといわれていた。それは、俺がまず川をずうと見て回つて二度目にアユのなめた後を釣るようにしたからだ。当時、友釣りをやる衆といえばあんまり真面目な衆ではなく酒を飲めば酒ぐせの悪い衆が多かつた。だから一寸と変わつたヤクザばい衆が友釣り師だつたんだ。」

利八氏が子供から大人になりかけた、明治末から大正にかけて狩野川からは後世に名人といわ

れる釣り師が生まれていた。

利八氏は「名人上手といわれるのは、他の衆より毎日平均して多くの魚を獲ることが出来る衆だ。」といい、やがて、若さと腕と足でめきめき水揚げ高を増し、名人といわれる技法を身につけていつた。

この頃、東京市場に送る狩野川のアユは年ごと増え続け、一九一四年（大正三年）に始まつた第一次大戦で国内産業は一気に活況をみせれば売れるブームに沸きかえていた。

東京を中心に鉄道輸送網、道路、郵便電信業務は飛躍的に伸び、製氷設備は生鮮魚貝類の市場を拡大してきていた。

献上魚といわれたアユは、当時、庶民が日常食する魚ではなく、金持ちや一部の人が食するもので、友釣りで獲つた大形のアユは一級品として高い市場性を持つていたのである。

大正の始め長良川郡上の大アユが東京日本橋のアユ問屋に入荷し始めると、味と形が高く評

働され、高まる需要をまかなうためにも問屋は長良川筋の入荷を真剣に考え始めていく。日本橋のアユ問屋「大松（だいまつ）」は狩野川のアユを多く扱う荷受問屋だった。「大松」は狩野川釣り師の技術や職漁者の層の厚さなど仲買人を通じて充分知っていたのだろう。

「大松」は修善寺のアユ仲買人小林卯三郎と米屋の菊池常作と計い、郡上アユの東京送りを計画し当時の金で五〇〇円を貸したんだ。二人はその金を買付けの元手にし地元から腕のたつ釣り師を連れて行こうということで、俺と一諸に行つてくれとたのまれたんだ。」

利八氏が初めて長良川に遠征に出た年は大正七年だった。「アユ釣放談」（昭和五十六年一月自费出版）

（二）利八氏郡上八幡に行く

郡上八幡までの道のりは利八氏によると、「岐阜まで汽車で、岐阜から電車で美濃町まで行つ

て美濃町から八幡までは半日以上も歩いた」と、又「東海道線富士駅で持急に乗り換えるとき、長い釣りサオが問題になり乗せる乗せないで争いになつて、車掌が乗せてもよいといえれば乗せるが駄目だといえれば乗せないことになつて、車掌に頼みこんでようやく乗せてもらつた」持つていつた継ぎサオは仕舞寸法が七・八尺のサオだった。その時車掌は持ち込みが許される長さには弓の寸法六尺七・八寸前後だといつていた。

初めて見る郡上八幡の町と川を利八は、「家の梁り、板戸、格子も紅がらで赤く塗られ町筋がポウーと赤くもやつている柔らかな感じの町だった。びつくりしたのは長良川、川もでけえが橋の上から川を見たらシラスを干したように川底が見えねえくらいアユがいる、ピカピカに光つているんだ。」

利八氏が二十七才のときである。三人は当時、「角館（かどかん）」という、戦後岐阜へ移つり現在時計店になつている新町商店街通りの旅

館に宿をとつてゐる。

川に出た利八氏等を驚かせたのは郡上の釣り師の姿だつた。「ふんどしも付けねえ素裸で川の真中に立込んでゐる。サオは物干サオのような強い一本サオ、サオの長さは三間ぐらい、中には竹同志を差し込んだ継ぎサオ（並継ぎ）を使つていた釣り師もいたなあ、俺のサオは継ぎにブリキを巻いた三本継ぎの四間半ぐらい、自分で作つたものを持つていつた。」

利八氏は、白木棉の長袖、前合せの膝上までのズボン、足は半中のぞうり、仕掛けといえは、しぶ糸の道糸、ハリスは二厘の本テグスにスガ糸で伊豆バリをきれいに二本巻きつけたもの、しゆ木と三匁の割りオモリを付けたものだつた。

「はし（へち）のアユは十匁か十五匁でいくらでも釣れ、でけえアユはしんとうにいて四十匁、五十匁のアユで、俺のサオは三日と持たずにささくれて使ひものにならなかつた、それで土地の衆が使つていた先が太く胴がやわい差し



伊豆の釣り師が泊つた「角館」
（現在時計店）新町商店街通り

込みが竹同志の重てえサオをたしか一円五十銭で買つて使つた。そして一日一貫二百匁から一貫五百匁拾うように釣りどんな日でも一日一貫

目を切ることはなかつた。」

アユ仲買人の小林卯三郎と菊池常作は利八氏のアユと地元で買いつけたアユを八幡の仲買人が荷作りするようにして、名鉄電車の通る美濃駅まで運んでもらい「大松」に送り出した。

一週間もたないうちに「大松」からアユが腐つていて売りものにならないといつてきた。あれこれと手だてをつくして送つても七月郡上八幡から東京までは無理で十日ばかり続けたが、東京送りは失敗し、利八氏は二人と別れ八幡に残つて地元の仲買人を相手に商売を続けていった。

「あとでわかつたことだが、東京送りの失敗は郡上八幡で氷をつめただけで東京に直送したことで、岐阜でもう一度貨車の時間に合わせて氷を補給して送れば成功したのである。」と利八氏は語っている。

一九一一年（明治四十四年）二月、岐阜市と美濃町の間二十五キロに美濃電気軌道（名鉄）

が開通したことで郡上八幡周辺のアユは岐阜から名古屋、東京市場への道がひらかれてきた。

当時の模様を八幡町の安福康次氏は郷土文化誌「郡上」七号に、「氷たんぼで、氷を作つて、冷やいて、美濃町まで、荷車で運んで美濃町から電車で岐阜、岐阜から東京つていう風に、東京市場へ、郡上のアユを出荷するようにしないたもんで、アユの値が通るようになったんやな。そら東京では、大きいアユは、九州の球磨川か郡上かつていつたぐらいのもんで、百匁級のは、一匹五円で売れたんやで・・・」

又、一九七八年（昭和五十三年）十一月発行の亀井巖夫著、「釣り風土記」の「長良川ノート」の中で八幡町の大多屋（だいたや）、清水駒次郎氏の話として、「大多サがもの心ついた頃、八幡町では「八百浅」がアユの集荷をはじめていた。夕方になると、たくさんのアユがあちこちから持ち寄られてくる。アユの勘定をしている帳場の横では石臼で氷搗きも始まる。氷は堀越峠

の西から落ちる、犬鳴洞（谷）で冬の間に採り、倉庫に入れておいた天然氷である。これを石臼に入れてきねで搗き砕くのだ。

その氷をつめて、あたりが暗くなつた九時頃、いよいよアユが出荷される、ずらりと八百浅の店の前に荷車が並ぶ。五台、六台、時には十台近くもあつたろうか。引き手は町の若い衆たちで、八幡町から美濃町まで、八里の険しい山坂を、夜つびいて突つ走るのである。」

美濃町に夜明けについたアユは、ここで氷をつめかえて名鉄電車で岐阜の市場に出された、と「長良川ノート」は伝えている。

(三) 郡上八幡のこと (1)

当時、郡上の釣り師で上手な人で三百匁、五百匁を釣る人はいなかつた。利八氏は土地の釣り師の仕掛けを見て、「掛からねえように、掛からねえようにこしらえてあるんだ。しゆ木でヘリスは馬素の三本より太い針金のようだつた、

その先に小さなハリを一本つけた吹き流しの仕掛けで、大きな五匁のオモリがおとりの鼻先にぶら下がつていたよ。釣りも上手ではなかつた、荒い瀬の中におとりをほうり込んで掛かるまでじいつと待つてゐる釣り方でトロ場など引く釣り師はいなかつた、目カゴ（おとり箱）を水につけた中にアユを入れていた。伊豆の衆と違つて郡上の衆は捕つたアユをすぐ使はないで仕舞い込む、だから余計にアユは掛からない、俺の四分の一も釣れなかつた。」

「アユの話をしてくれと頼まれ、場所は忘れてたが美濃町から電車で駅を降りると、真黒に陽焼した二・三十人の衆が俺の姿を見て伊豆かという、そうだとゆつたら、皆んなでわあわあいいながら俺を会場に連れていつた。

会場はいつばいだつた。わしがここで掛けたアユを見せてくるといふと、大きな盆に三十匁ぐらいのアユを十尾ぐらい乗せて、わしの前に置いた。そのアユを見るとどのアユも尻ビレが

切り裂かれている。わしはそのアユを握つてこのアユをかけた釣り師は誰れかと問い、最早やわしは皆さんに何も教えるものはない。尻ビレが切り裂かれているこのことこそ今日私が皆さんに話そうと思つていたことだと。

尻ビレの縫い通し二本バリの伊豆の仕掛けと、従来の吹き流し一本バリとの差を説明しアユの習性を話しながら、技術をもつと磨くように訴え、実技もして見せ大変喜ばれた。」と語つてゐる。

サオを高く構え或る時はオモリも使わずにおとりを自由に泳がせながら次々に大アユをかけていく利八氏の姿を、郡上の釣り師は伊豆の釣り師の技法にただただ驚きの目を見張るばかりであつたらう。

ここで長良川の友釣りの歴史を見てみよう。

一九六九年（昭和四十四年）三月、岐阜市教育委員会が発行した「美濃国長良川アユ漁取調書」「岐阜市文化財シリーズ2」に長良川の友

釣りに関する一項が記載されている。

この文書は「後記」によると明治初年の長良村戸長、川出金三郎が県令、小崎利準の求めに応じて提出した書類であつて、長良川の鵜飼の沿革がわかる貴重な資料である。と記されているが、友釣りの歴史を知るうえでも重要な資料である。この項の全文は、

「一 安政五年アユ掛針一名俱釣禁令ニ相成ル此漁方ハ当国ニ発業スルハ漸ク嘉永三四年比ヨリ以来ナリ然ルニ此漁方ハ親アユヲ糸ヲ以テ括リ又糸ニ釣針ヲ数多附テ之ヲ川瀬ニ流ス時ハ群集スルアユ大イナル分親アユニ寄添ヒ或ハスレ争フテ自ラ此針ニカカルヲ捕魚ス然ルニ此針アユノ皮内ニヲレ込ミナカラ逃レタルヲ鵜之ヲ捕ル其手負タルコトヲ知スシテアユ詐製スルノ際漸ク之ヲ発頭セル此針鍛ヒ能ク至テ折レヤスキモノニシテ衆人ニ害ヲ醸スコトアラント堅ク之ヲ禁止ラル」

一八五〇年（嘉永三、四年）今から一三五年前アユを糸で括つて糸に釣りバりを数多くつけて川瀬に流す。今の友釣りの初期の技法が行われていたことを資料は示している。

しかし資料によれば一八五八年（安政五年）一二五年前「俱釣」はハリが折れてアユの皮内にささり衆人に害を与える恐れがあるとして禁止されてしまふ。

亀井氏の「長良川ノート」の中で大多屋（だいたや）清水駒次郎氏の話として、「郡上のアユ漁は、明治の末頃まではサオ釣りよりも網漁が「本手」であつた」として「網漁に替つてサオ釣りが少しづつ盛んになりだすのは明治末期から大正の初め頃である」と。「大正中期になると、アユはサオ釣りでなければならなくなつていた。（中略）そして決定的なサオ釣り革命が郡上で起つた。

その導因は伊豆の漁師たちの出現であつた。（中略）角館（かどかん）という宿に伊豆が泊

つとりました。三人・五人と一諸に來たのですが、それがあんな、ええかな、ここんとこが大
事やで、みな継ぎザオを持つとりましたで、今
から思うと竹を三つに切つて、ふたとこブリキ
で継いだだけの幼稚なものじゃあつたが、わし
らの藪から切つてきたまんまのサオと違ひます
で、とにかく長い、その長いサオでそりやあ、
どえろり釣りよりしました。役者が一枚も二枚も
上でした。」

長良川は未開の釣り場であつた。鵜漁の川として友釣りは禁止され、その影響は明治の末までも及んでいたのである。しかし決定的なことはアユの市場であつたらう。

(四) 郡上八幡のこと (2)

その時分、八幡でのアユの仕切値は百匁一円二・三十銭、宿代は弁当持ちの一円、泊つて小使いを使つても毎日十円も残り半月で「家に百円送金したら家の者達は他人様の金を盗みして

送つたのではないかと心配した」と「アユ釣放談」でも伝えている。又、利八氏は長良川の支流の吉田川でアユはいないといわれたエン堤うえの場所でアユのヘミ跡を見て六十匁、七十匁の大アユを四日も五日も一人で大釣りし、仲買人の口から伊豆の釣り師の名が郡上の釣り師の間に知れ渡つていつたと。角館を訪ねてくる土地の釣り師、釣り場で仕掛けを見せてくれと寄つてくる釣り師、利八氏はいわれるままに仕掛けを渡したり作り方を教えたりして土地の釣り師の頼みを聞いてやつたと語つている。

明けて一九一九年（大正八年）穂先きの太い穂持ちがしつかりとした自作の胴調子の四間半の継ぎサオを作つて、月が瀬の内田梅吉、柿木橋の稲村、堂の川の堀江文吾、河津の板垣与平を連れて角館に宿をとつた。七月十五日である。翌日「吉田川が長良川と合流する二・三丁下流で釣つていると、昼間の三時半ごろ上から真黒の煙が川一ぱいに押し寄せてきて堤防の上を町

の衆が大声をあげながら走り回つている、初めは何のことかわからなかつたが、川をあがつて見ると大火事なんだ、急いで宿に帰ると吉田川の向こうが火元で煙がどんどんこつちにくる、宿は大さわぎしていて、橋の向かいに大きな料理屋があつて隣りが親戚の家で、わしらも手伝つてあれも積みこれも積みと荷物を山にして荷車でこつちに運んだりしてやつたよ、旅の衆が火事で手伝つてくれて有難とうと礼をいわれたもんだ」

角館は類焼を免がれ利八等は毎日川に出るところができた。

当時、「土地の釣り師は四尾か五尾釣れば大釣りだつた。

名は忘れたが万金タンの元締をしていた親父さんが友釣りが好きで毎日川にきていた。今日はどうかと聞くと、大漁だよと答える。

幾尾釣つたという、三本よというんだ。

川は朝、早く行つて場所をとると上下八間は他

人が釣れない約束になつていた。

わしらは宿飯喰つているんで少々こうかつに考えて、川に行つてサオや道具が置いてあると、八間先きの釣り場が悪くとも入つてそこで掛けると、わざわざ下に降つて、「やあやあ貴方の区域にきてしまつたよ」と、あやまりの言葉をかけて、そこでおとりを出して二・三尾かけてから、自分のところへ戻るようにしたんだ」

利八等が郡上へ遠征するようになってから狩野川の釣り師は七月の声を聞くと金になる郡上のアユを目指してぞくぞくと上流大和村から、下流美並村の相戸、深戸と多い年は五十人も釣り師がやつてきた。そして八月も終りになる頃ふところを重くして伊豆に帰ることができた。利八氏は、ひと山越えると飛弾川という大アユが出る川があるといわれ、堀江文吾と連れの人で郡上八幡から堀越峠を一日がかりで越えて飛弾金山に着き「佐野屋」に泊り、上流一里のところの「麻生谷」というところに滝が落ちて

いた。

「そこはいかだにする木材を上流から流してここでとめている場所、そこから強い瀬が向いの岩根にぶつつけている釣り場で、深さも水量もあつた。おとりは三十匁、掛かるアユは七十匁を超す



堀越峠から郡上八幡の町 川は吉田川
正面山の根を長良川が流れている

大アユで、引くわ引くわ三尾掛けても一尾取り込めれば上々、連れの二人は掛ければおとりごと持つていかれ釣りにも日当にもならなかつた。

飛弾川の釣り師といえは二間半か三間の一本サオで幼稚だつた。保険の外交員で友釣りを習いたいと頼みこまれ道具はといえは、竹を切つてくるといつて、カンレイシヤで網を作つて一本サオを持つてきた。仕掛けとおとりをつけて釣らせる、掛かつた掛かつたと大声で呼ぶんで、網でまくつてやつたり、こんどはおとりがとられたから元気なおとりをつけてくんなどいうんで付けてやつたり、二日ぐらい面倒を見てやつた。俺が文吾さんと連れに保険屋の面倒ばかり見ていたら釣りにならねえと話したら、断れえというんだ。だけど俺は年も若えし、いはずれえというのと、文吾さんと連れが俺がいつてやると、保険屋に君の面倒を見ても一銭だつてもらえるわけでなし、サオ一本で世渡りをするんで、吊り下げられたら困ると断つてもらつた。

あれから保険屋はどうなつたか。」

利八氏は長良川の上流大和村から白鳥を釣り、白鳥から油坂峠を越えて越前大野を流れる九頭竜川にも遠征して若い熱心を釣り師から「ノシノシ」といわれ、とまどつたことなど語つてゐる。

しかし、生活をかけた郡上の釣り師達もいつまでも伊豆の釣り師に負けてはいなかつた。

狩野川の技法を学びとつた釣り師の中から利八等が入つて四・五年も過ぎると、一日一俵の米を稼げる名人が生まれてくるのである。

一九一八年（大正七年）郡上のアユの仕切値は百匁、一円二十銭から一円五十銭、その頃の八幡町の諸職の平均一日の賃金を「八幡町史」（昭和三十六年発行）の中で一九一九年（大正八年）を見ると、「農作日雇七十二銭、左官大工一円七十銭、屋根屋二円十銭、日雇人夫一円二十三銭」となつてゐる。だから当時三・四十匁のアユを五尾も釣れば日当が出たのである。

まことに、伊豆の釣り師が郡上の釣り師に伝授した二本バリ尻ビレ通しの仕掛け、継ぎザオの技術、割りオモリ、馬素に変わる本テグスのハリス、川の見方とサオさばきの技法は長良川の友釣りを一変させていつたのである。

（付記）

次回は長良川に移住した伊豆の山下福太郎氏のことを書く。